Vinay Sitapati,

Half-Lion: How P.V. Narasimha Rao Transformed India.

Gurgaon: Penguin Books India, 2016, 391pp.

佐藤　宏

Ⅰ　インド政治研究と伝記資料

独立後インド政治史研究における欠落として，伝記作品の手薄さを指摘したのはラーマチャンドラ・グハであった［Guha 2008］。そんなことはなかろう，ガンディー，ネルー，インディラ・ガンディーなど，インド政治については読み切れないほどの伝記，評伝類があるではないか，という反論も出されよう。グハが欠落というのは，州レベルの有力政治家，対外的な知名度は低いが中央政治の節々で重要な役割を果たした政治家たちを念頭に置いているのである。雲上に聳える頂だけでなく，裾野を覆う雲が晴れてこそ，インド政治の山容は明らかになるというものである。また優れた伝記作品が歴史理解を豊かに深めることも言うまでもない。グハ自身による独立後政治史，*India after Gandhi* では，多数の伝記や回想録がきわめて効果的に引用されている［Guha 2007］。

本書で取り上げられるのは，そのような「知名度の低い」政治家の一人，1991年から96年まで連邦首相職にあったP. V. ナラシンハ・ラーオ（Narasimha Rao, 1921～2004年）である（以下，ラーオはラオと表記する）。この5年間は独立インド政治史上でもまれにみる一大転換期であった。

冷戦の終焉，経済自由化の断行，アヨーディヤー問題に象徴されるヒンドゥー至上主義の興隆，国民会議派（以下，会議派）による最後の単独政権と，在任中の出来事を数え上げただけでも，彼の首相期が大きな転換の時代であったことが理解できる。しかも首相の責を担うことになったのは，たまたまラジーヴ・ガンディー（Rajiv Gandhi）の暗殺という予想外の事件が，引退寸前の身にあったラオを政治の現場に引き戻したからであった。その点では，ソニア・ガンディー（Sonia Gandhi）会議派総裁の辞退により，思いがけずも2004年に首相となったマンモーハン・シン（Manmohan Singh）と同じく，あるいはそれ以上にラオもまた“Accidental Prime Minister”ではあった［Baru 2014］。

ラオの首相期を最後として，会議派が単独で政権を担う時代は終わった。会議派の凋落とかかわる上記の出来事のすべてに，彼は重要な役割を果たしたから，その責任の多くがラオに押し付けられた。ラジーヴの長男ラーフル・ガンディー（Rahul Gandhi）は，われわれ家族の一員が首相であったら，アヨーディヤーのバーブリー・マスジッドの破壊はありえなかったと2007年に語っている。

本書はそうした政治的な評価の影で葬られた転換期の一政治家の姿を克明に再現している。政治家ナラシンハ・ラオ復権の試みでもある。

ところでラオを取り上げた伝記や彼自身による部分的な回想録などがこれまでなかったわけではない。周辺の政治家，官僚による回想記にもラオはしばしば登場してきた。ここではラオが信頼した2人のインド行政職（IAS）官僚による回想録である，Alexander［2004］とPrasad［2012］の2冊だけ挙げておこう。とくに後者は州首相時代からラオの懐刀ともいうべき存在で，首相府つきの情報補佐官であったP. V. R. K. プラサードの回想録である。コンパクトながら要所を漏らさず押さえており，内容的にも本書と矛盾するところがない（アレクサンダーについては後に触れる）。しかし既存文献に比べての本書の特徴は，何よりもプラサードも含む100名あまりの関係者へのインタビューと，2人の子息によって提供されたラオの私蔵文書が駆使されているところにある。これらの文書類には日記，書簡はもとより，政策や政情に関するラオ自身のメモ，情報部局からラオが取り寄せた秘密報告書なども含まれる。こうした精力的な裏付け作業が本書の信頼性を高め，本書を臨場感あふれる一編の読み物に仕立て上げている。

Ⅱ　本書の組み立て

本書では15の章が順次語り継がれているが，大

きな組み立てとしては，前後2段に分けられる。前段は，生い立ちから現在のテーランガナ州にあたる旧アーンドラ・プラデーシュ州内陸地方の有力政治家に成長し，中央政治に登場したのち，1991年6月に予想外の事態から連邦政府首相に就任するまでが描かれ，後段では首相就任後，冷戦後世界におけるインドの経済開放と国際的地位の確保に努めたラオの姿が再現される。

まず，分量として本書の3分の1ほどを占める第1章から第6章までが前段である。第1章 Half-burnt Body（生焼けの遺体）は本書の意図を述べた序章で，第2章 Andhra Socialist, 1921-71（アーンドラ地方の社会主義者 1921～71年）から第3章 Puppet Chief Minister, 1971-73（傀儡州首相 1971～73年），および第4章 Exile, 1973-74（追放 1973～74年）の3つの章で，旧ハイダラーバード藩王国の北部カリムナガル県のバラモンの在地地主家庭に生まれたラオの生い立ちから，独立後のアーンドラ・プラデーシュ州の州首相となるまでが描かれる。

第5章 Delhi Durbar, 1975-91（デリーの宮廷 1975～91年）の主題は，会議派の幹事（General Secretary，複数任命される）として活動の場を中央に移したのち，インディラ・ガンディー，ラジーヴ・ガンディーの2代の政権で，中核閣僚として忠実に職務を果たしたラオの政治生活である。ラジーヴの暗殺という突発的な事件がなければ，ラオの政治生活はここで終止符が打たれたはずであった。しかし，第6章 Monk to Monarch（僧院長から君主へ）で克明に描かれるように，招聘されていた僧院長の職を辞して，心臓疾患を抱えた身で連邦政府首相に就任したのが1991年6月であった。

第7章以下の後段では，ソ連の解体，冷戦の終焉という国際環境の激変を背景に，経済自由化（経済改革）や外交政策の転換をどのようにラオが主導したのか，また国内政治では1989年以降の会議派退潮の局面において，党総裁，首相として党，議会をどのように切り盛りしたのか，本書の核心部分が提示される。

主題は，第7章 Rescuing the Economy, 1991-92（経済の救急対策 1991～92年），第8章 Growing the Economy, 1992-96（経済成長政策 1992～96年），および第9章 A Welfare State?（福祉国家？）が経済改革，第10章 Surviving Party and Parliament（党と議会を乗り切る），第11章 Managing Sonia（ソニア対策），およびインド人民党（BJP）らによるアヨーディヤーのモスク破壊を扱った第12章 The Fall of Babri Masjid（バーブリー・マスジッドの崩壊）の3章が国内政治，そして第13章 Look East, Look West（ルック・イースト，ルック・ウェスト）と第14章 Going Nuclear（核武装への道）が外交，国防政策を扱う。

結びの第15章 Lion, Fox, Mouse（獅子，狐，鼠）では，君主は狼をも驚かす獅子の勇猛さのみならず，罠を悟る狐の狡猾さをもすべからく併せもつべし，とするマキアヴェッリの教えを下敷きに，政治家としてのラオの多面的な容貌を描いている。ラオの名であるナラシンハ（Narasimha）はヴィシュヌ神の化身のひとつ，人間の身体に獅子の頭と爪をもつ「人獅子」を意味し，本書の題名 Half-Lion もそれに由来するが，ナラシンハ・ラオは名のみならず，統治者としても Half-Lion であったというのが本書の核心のメッセージであり，そのタイトルの含意でもある。

本書はストーリー性に富んだ評伝である。紙幅の関係から，情報豊かな本書を章ごとに詳しく紹介できないのが残念であるが，評者がとくに注目した部分を取り上げ，多少の感想ないし批評を述べることとしたい。

Ⅲ　前半の注目部分

テーランガナの文化と歴史

前段部分でまず注目されるのは，ラオという一人の政治家を生み出した地域の背景とその歴史である。政治家としての成熟した活動だけでなく，人物のいわば「形成史」にまで踏み込めるのは評伝という表現形式の利点でもある。

とりわけ第2章の記述が興味深い。ここでは，ラオの生地であるハイダラーバード藩王国の北部カリムナガル県が，テルグー，ヒンディー，マラーティー，カンナラ，さらにはオリヤーという南北インド5つの言語が混在し，加えて藩王国の宮廷ではウルドゥー語，ペルシア語が用いられるという多言語環境の地であることが指摘される。ラオが，サンスクリット，英語，スペイン語を含め10言語の会話能力を備えたのは，こうした環境に由来したと著

者はいう。

また，家族的な背景としては，この地方でドーラ，西部マラーティー語地域ではデーシュムクと呼ばれる在地地主の出身であり，養家の土地1200エーカー（480ヘクタール）を所有する大地主であった。残念ながら評伝の中では，ラオの故郷でテーランガナと呼ばれるこの地域が，1947年の独立を挟む前後の時期，藩王国の民主化と反地主制を掲げたインド最大の農民闘争の舞台であったことが明示的には指摘されていない（ラオが最初に立候補した1952年の連邦下院選挙でインド共産党候補に敗れたことで間接的に読み取れるが）。このテーランガナの農民闘争とラオの「社会民主主義的志向」（第9章）との関連は，考究されてしかるべき課題だと思う。

会議派によるハイダラーバードでの土地改革は，藩王の藩屏ともいうべき領主的地主（ジャーギールダール）支配の廃絶，さらに進んで在地地主や上層農の一部をも対象とする保有上限を超える土地の収用と土地なし農への分配という2段階をとった（全インドでも同じ）が，第2段階の実施には既得権益者の抵抗が強かった。1971年9月に州首相に就任すると，ラオは州会議派内の抵抗を押し切って，土地改革（土地所有上限設定）を主導した。彼自身も1200エーカーのうち1000エーカーを放棄したのであった。

ガンディー家の忠臣？

第2の注目点は中央政治でのラオの役割である（第5章）。会議派の幹事として1974年10月に中央政治に参入して以降の，連邦閣僚としての活動については，注目すべき記述はあまり見当たらない。会議派の中核閣僚でありながら，インディラ・ガンディー，ラジーヴ・ガンディーの影から一歩も踏み出さない忠臣政治家という印象がラオにはあったが，ガンディー母子生存中のラオの表向きの姿はおおむねそのようなものであった。ただし，彼がしばしば外相に起用され，あるいは，ラジーヴが1989年に立ち上げた科学者のみからなる「核兵器委員会」内部の議論を，政治家としては大統領R. ヴェンカタラーマン（Venkataraman）のほかはラオのみが知らされていたことは，冷戦終焉のただなかに首相に任じられたラオにとっては，極めて貴重な経験であったに違いない。とくに「核兵器委員会」に関する本書の指摘は，のちの第14章の記録との関連で極めて重要である。

ラオ政権の誕生と組閣

前段第3の注目すべき部分は，第6章で明らかにされているラオ政権誕生のいきさつである。ここではガンディー母子生存中の小心ともみえるラオとは打って変わって，政権への野心を巧みに現実のものとした策謀家が姿を現す。

1991年5月21日22時21分，ラジーヴ・ガンディーがスリ・ランカのタミル過激派によって爆殺された。ラオが翌日10時半にデリーに到着すると，会議派重鎮の一人プラナブ・ムカージ（Pranab Mukherjee）から，後継の会議派総裁，つまりは首相候補としてラオの名が挙がっていると知らされる。インディラ・ガンディー暗殺直後の後継者選びで，名乗り出るのが早すぎてしくじったのが，当のムカージである（ムカージはラオが自分の轍を踏むかどうか試したかったのだろうか）。予期しない機会を前に，野心を見せずに野心を遂げる，ソニア・ガンディー夫人やライバルとの駆け引きを描く部分は本書全体のなかでも読みどころのひとつである。

組閣の経緯，とりわけ経済改革を担当する蔵相人事のいきさつも興味深い。組閣では大物をすべて入れ，蔵相には欧米諸国と国際機関につながりのある経済学者の選任を，ラオが信頼する元IAS官僚P. C. アレクサンダー（Alexander）に依頼した。また内閣次官ナレーシュ・チャンドラ（Naresh Chandra）からは，前政権時代に中枢官僚（複数）がまとめた経済改革に関する8ページのメモを手渡された。ラオを経済改革に方向づけたのはこのメモであった。著者の指摘では，ラジーヴ政権期にラオが経済改革推進派であったという証拠はない。あくまでも1991年の外貨危機で改革派に転換したのである。アレクサンダーが推薦したのはまずI. G. パテール（Patel），次にマンモーハン・シンであった。パテールが辞退し，マンモーハン・シンが同意したのは6月21日就任式当日の午前という綱渡り人事であった。パテールが仮に受諾していたら，その後の政治史はずいぶんと異なる様相を呈したことであろう。

Ⅳ　後段の注目部分

後段では，ラオ政権下の経済改革，内政，外交・安全保障の3つの分野について，それぞれ注目すべき記述を拾い上げてみる。

「経済改革」推進本部

第1に取り上げるのは，何よりも「経済改革」の舞台裏についての詳細な記述である（第7〜9章）。

新首相の焦眉の課題は，1991年6月には年間輸入額の2週間分にまで底をついた外貨対策であった。「インドの対外信用もどん底」（IMF理事に出向中の官僚G. アローラ［Arora］）のなか，政策転換は必至であった。ここで評者が興味深く感じたのは難局を乗り切るための政策推進の核となった首相府メンバーをはじめとするラオ側近の顔ぶれである（とくに第7章，第8章）。

首相府を切り盛りする首席秘書官にはインド行政職（IAS）のA. N. ヴァルマ（Varma）が就いた（これもアレクサンダーの推薦）。彼と内閣次官ナレーシュ・チャンドラを中心に関係各省次官を糾合した毎木曜日の会合が政策を練り上げた。チャンドラは退任後も，バーブリー・マスジッド問題（第12章参照）や核兵器開発（第14章参照）などのアドバイザー役を務めた。このほかには，M. S. アフルワリア（Ahluwalia），ジャエラーム・ラメーシュ（Jairam Ramesh），ラケーシュ・モーハン（Rakesh Mohan）らがラオ＝マンモーハン・シン体制を支えた（彼らはのちの会議派連合政権でも重要な役割を果たした）。

しかしラオが用いたのは，こうした経済テクノクラートだけではなかった（第9章）。著者によればラオは，成長の果実を財政政策によって再配分する社会民主主義者である。たしかに教育，保健衛生は彼の州首相時代からの得意分野でもあり，ラオが農村開発相を兼任したのは，こうした分野で彼自身が采配を振るいたいがためでもあった。この分野では，数名の有能で献身的な「社会主義者」官僚を登用し，農村雇用の創出政策，配給制度改革に投入した（第9章）。いわゆる経済自由化だけでなく，こうした再分配政策にラオが強い関心を抱いており，彼のこれらプログラムが，成果はともあれ，その後の政権（とくに2004年に成立した会議派連合政権）に影響を与えたとする点も，本書の重要な指摘であろう。

内政――ソニア・ガンディーとの確執――

第2に，この時期の内政はどのように描かれているだろうか。

第10章では，会議派党内の古参幹部が虎視眈々と機会を狙うなか，BJPをはじめとする野党による任期中3度にわたる不信任動議をラオがいかに切り抜けたかが語られる。彼が駆使したのは，野党間，とくにBJPとその他野党の間の分断工作，それに有力野党の分裂工作である。分裂工作の対象となったのはおもに会議派，BJPに次ぐ第3党のジャナタ・ダル（大衆の党の意）であった。野党の分断と分裂工作は，連邦下院の過半数を維持できない第一党が取らざるを得ない生き残り策であった。

ラオ政権は会議派の単独政権であり，連合政権ではないが，評者としては，1996年以降の連合政治における会議派とBJPによる多数派工作の原点がここにみられるように思う。

また野党による脅威と並んで，あるいはそれ以上にラオが警戒を要したのは会議派内部の動きであった。最大の脅威は，党古参幹部による策動の背後に見え隠れするソニアの姿であった。ラオは就任当初から公的にも私的にもソニアに気を遣った。週に1度は直接に訪問し，2度は電話した。風向きが変わったのはアヨーディヤー事件で，ソニアがこれを批判する初めての政治的発言を行う。この時からラオの警戒が始まる。このように，アヨーディヤー事件は，会議派とBJPの対立構図だけでなく，会議派内部にもラオとソニアの亀裂を広げたことが本書から確認できる。その後，1993年7月のラオ内閣に対する最後の不信任動議の乗り切りでラオが自信を深め，ソニアを軽視する傾向が生まれ，週1度の訪問も途絶える。両者の間の溝はこの時期に決定的になったとされる。

アヨーディヤー事件への対処を誤り，BJPやヒンドゥー右派組織によるバーブリー・マスジッドの破壊を許したことはラオの汚点であり，政権基盤の弱体化へとつながった（第12章）。この事件に関して，ラオ自身の態度に問題を求めるとすれば，彼のインド社会観自体もヒンドゥー中心主義的であり，世界ヒンドゥー協会らヒンドゥー急進派の危険性を過小

に評価し，彼らの背後にいると当時みられていたBJP幹部L. K. アドヴァーニ（Advani）のこれら組織への影響力を過大に見積もっていた。事実は，アドヴァーニ自身もヒンドゥー急進派の暴走を抑えることができなかったのである。その結果，著者の言葉を借りれば「ラオはモスクも，ヒンドゥー多数派の支持も，そして彼自身の名声をも同時に失った」のであった。

内政の部分ではラオとソニアの関係を中心に，事態の推移と登場人物の動きが手に取るように鮮やかに描かれている。

冷戦後インド外交の操舵手

外交・安全保障の分野は，ラオが与党内部からの妨害にあわずに，比較的自由に裁量を振るえる分野であった。冷戦後世界へのインドの外交的なかじ取りを，対米関係の改善，東アジアに関心を向けた「ルック・イースト」，核開発の推進など明瞭な目標を立てて成功裏に推進したとして，著者のラオ評価もこの部分では非常に高い。

評者としてあえて言うならば，ラオ政権が冷戦後世界への対応において，何らの試行錯誤もなしに，目標に向けて一路邁進したと描くのは正確ではあるまい。たとえば，評者には鮮明な記憶だが，1991年8月のソ連における保守派の反ゴルバチョフ・クーデタに際して，改革の手順は慎重であるべきだ，と保守派に同調する見解をラオ首相は表明している。わずか3日間で瓦解したクーデタであったゆえ，ラオ政権は直ちに路線の修正を図ったが，この1点をみるだけでも，試行錯誤，混乱ぶりは理解できよう。本書ではこの点に触れられていない。旧ソ連と軍事・経済関係の深いインドにとって，冷戦後世界への適応は当然ながら困難な課題であった。

外交に関しては，ラオが「経済外交」をインド外交の中心課題に据えたとする本書の評価は正しいだろう（第13章）。ラオが経済外交の重要性をインド外務省以上に認識していたことを示す興味深いエピソードも紹介される。たとえば1994年5月の訪米では，首脳会談とともに企業経営者との会合が設定されたが，そのお膳立てはインド大使館ではなく，ラオの密使（高名なヒンドゥー僧）が行ったという。アメリカに限らず，ラオが任期中に活発に展開した経済外交は，当時のインド外務省にはきわめて不得手な分野であった（ネルー外交の遺産とみられないこともない）。

その点で「ルック・イースト」，つまり対東アジア外交はまさに経済外交そのものであった（これに対して今日の「アクト・イースト」は安全保障に急傾斜している）。ラオは1993年9月に訪中し，次いで韓国を訪れた。のち1995〜97年に外務次官となるサルマーン・ハイダル（Salman Haidar）がこの時に「ルック・イースト」という標語を打ち出した。ラオは韓国の教育水準に強い印象を受けた。さらに同年にタイ，翌年にはシンガポールへと「ルック・イースト」政策は本格的に展開される。

ラオの「超党派外交」

「超党派外交」もラオ首相の外交・安全保障政策の特徴であった。とくにラオ政権とヴァージュペイー政権，この2つの政権の間には外交・安全保障政策上の明瞭な継承関係があったことを本書は示唆する。その象徴的な事例が核実験問題であった（第14章）。

一般には，1995年12月19日にラオは核実験に踏み切ろうとしたが，偵察衛星でこの動きを察知したアメリカの圧力で実験を中止せざるを得なかった，その後BJPのヴァージュペイー政権が選挙公約通り1998年5月に実験を実施した，といわれている。著者は関係者の証言などをもとに，これとはまったく異なる筋書を明らかにする。

結論から言うと，ラオは最初から1995年12月に核実験を実施するつもりはなかったというのである。アメリカの圧力でやめたというのも真相ではない。水爆実験を行うために時間を稼いだのであり，1996年5月に2種の実験を同時に実施するつもりであった（実際1998年5月の実験はそのような内容であった）。それを実行に移せなかったのは連邦下院選挙での会議派の敗北のためであった。1996年5月16日に首相に就任したヴァージュペイーに，ラオと「核兵器委員会」メンバーの国防省研究開発機構のアブドゥル・カラム（Abdul Kalam，のちインド共和国大統領），原子力委員会のR. チダムバラム（Chidambaram）の3人が実験に関する情報を申し送った。ラオは実験の「栄誉」を安んじてヴァージュペイーに譲ったのである。2004年の証言でヴァージュペイーは，ラオをインドの「核計画の真

の父親」と称賛した。

核問題だけでなく，パキスタン，中東外交についても，ラオがBJP幹部，とくにヴァージュペイーとアドヴァーニには，節々で協力ないし了解を求め，意識的な「超党派外交」を進めていたことが興味深い。

このようにラオは意図的に「超党派外交」を展開したが，その後の政権についてはどうなのか。「インド外交」と一口に言っても，外交政策を決定するのは具体的なそれぞれの政権であり，抽象的な「インド」ではない。私蔵文書，インタビュー，そして回想録などを広範に駆使した本書は，外政と内政の関係，外交政策の決定過程にまで踏み込んだ分析の豊かな可能性を予期させるのに十分である。

政治家ラオの復権

後段の最後に，本書の記述から，どのようなナラシンハ・ラオ像が浮かび上がるのか，著者による政治家ラオの総合評価を紹介しておこう（第15章）。

自党内部での強固な足場もないラオが，議会での多数をもたずに5年の任期を全うし，経済自由化を従来のいかなる政権よりも大胆に推し進め，冷戦後世界でのインドの地位を経済力の向上と核兵器開発に焦点を定めて追求しえたことは，「その路線への賛否はともあれ」（著者），否定はできない。ここから著者は政治家ラオにマキアヴェッリの「獅子」の要素を見出すのである。

他方でこの「獅子」は，経済政策にみるように，改革を継承と装い，強い抵抗の予想される農業，労働，福祉には手をつけないといった，狐の狡猾さと鼠の小心さをもそなえたHalf-Lionであった。機を見るに敏にして，政治的な制約を察知し，敵の強さと弱さ，その裏返しともいうべき自らの弱さと強さを正しく把握できる能力は，州首相以来の長い政治経験から培われた。個人的な感情をわきに置いて，適切な知識と能力のある政治家，官僚を用いたことも，忠誠だけで助言者を選んだインディラとも，友情だけで取り巻きを集めたラジーヴとも異なる点だと著者はいう。

にもかかわらず，ウッタル・プラデーシュ州のBJP州政権に対する大統領統治の導入をためらったためにバーブリー・マスジッドの破壊を防げなかったこと，ソニアを1993年以降無視したことなど，致命的な失敗もあった。しかし彼の成果全体からみればこれらは逸脱程度に過ぎないというのが著者によるラオの総合評価である。会議派主流から疎外されたナラシンハ・ラオの復権という目的を，本書は十分に果たしているだろう。

むすび――インド政治研究への示唆――

最後に本書から評者が汲みとったインド政治の研究上の示唆ないし刺激について触れてむすびとしたい。

本書はインド連邦首相という権力者の統治の実態，その表と裏を余すことなく描いている。基調はナラシンハ・ラオの再評価にあるが，その統治下での買収や意図的リーク，さらには諜報機関の活用から部分的には女性関係まで，筆に遠慮の気配はみられない。議院内閣制度の下での首相職（機構としての首相府）への権限集中は，議院内閣制の「大統領制化」と表現されるが，インドの首相府への権限集中の様態を研究するうえで，本書のような詳細な個別事例の積み重ねは欠かせない。

とりわけIASその他の幹部官僚が，政策の立案と継承に深くかかわるさまは，評伝ならではの臨場感にあふれており，政治研究資料としての本書の価値を高めている。なかんずく，核政策からアヨーディヤー問題まで，幅広くラオ首相の相談役であったIAS官僚で内閣次官でもあったナレーシュ・チャンドラの八面六臂の活動は大変興味深い。チャンドラが核収納庫の狭いパイプをその巨体を押し込みながらすり抜ける情景は笑いを誘う。ラオ政権期には役職としては存在しなかったが，その後の政権における国家安全保障補佐官（National Security Advisor）の先駆けともいえる存在だろう（なおナレーシュ・チャンドラは2017年7月9日に死去。直後の英字紙での追悼文に，著者によるSitapati［2017］を含め，Dhall［2017］，Sood［2017］がある）。

これらの記録から，執行府の長である首相と経験豊かな官僚とのコンビネーションの重要性を考えさせられるのだが，この書評を書きつつ評者が思い浮かべるのは，インドの現政権，ナレーンドラ・モーディー（Narendra Modi）政権の首相府主導政治のもとでの政官関係である。モーディー首相府内の政

官の力学を，本書に匹敵するほどに生き生きと描く作品が現れるのはいつになるであろうか。

文献リスト

Alexander, P. C. 2004. *Through the Corridors of Power: An Insider's Story*. New Delhi: HarperCollins Publishers.

Baru, Sanjaya 2014. *The Accidental Prime Minister: The Making and Unmaking of Manmohan Singh*. New Delhi: Penguin Books India.

Dhall, Vinod 2017. "Master of His Role." *Indian Express*, 17 July.

Guha, Ramachandra 2007. *India after Gandhi: The History of the World's Largest Democracy*. London: Macmillan（邦訳は佐藤宏訳『インド現代史　1947-2007』上下 明石書店　2012 年）.

——— 2008. "The Challenge of Contemporary History." *Economic and Political Weekly* 43 (26/27): 192-200.

Prasad, P. V. R. K. 2012. *PMs, CMs and Beyond, Wheels behind the Veil: Former PM's Media Advisor Speaks*. Hyderabad: Emesco Books.

Sitapati, Vinay 2017. "A Patriot and a Gentleman." *Indian Express*, 11 July.

Sood, Rakesh 2017. "The Man with the Clues." *The Hindu*, 11 July.

（南アジア研究者）